

最近の三十年の間、現代神学は激動と混沌の渦中にある。こうした状況下で、「読者が鳥瞰図的に現代神学のいろいろな動きを把握すると共に、これからの神学の進むべき方向を発見できるように手助けする書物を提供する」というまさに待望の書が出版された。二人の執筆者によって分担された各章はいずれもそのテーマに相応しい力作であり、教職や神学生はもちろん、現代神学に関心のある読者一般にとって、本書は格好の現代神学への指針となるであろう。以下、本書の全般的な内容と特徴を紹介することにしたい。

まず、本書は現代神学の多様な流れを時代と地域・言語圏と伝統という三つの角度から整理することによって、現代神学の鳥瞰図を示そうとする（第一部の ）。序論以下における三つの時期の神学 - 十九世紀のシュライエルマッハーからトレルチに至る自由主義神学、二つの世界大戦間の弁証法神学、第二次世界大戦後の二十年間の神学動向 - についての論述は標準的な神学思想史の記述と言えるが、本書の特徴はこれに続く一九六五年以降の神学をドイツ語圏、アメリカ、アジアの三つの地域にわけて詳論した部分に認められる。特に西欧から自立した現代アジアの神学動向の紹介は今後の神学の可能性を考える上で貴重な示唆を与えてくれる（民衆の発見、イデオロギーとの対話、文化神学）。続いて、以上のような時代的地域的な視点を総合するものとして、キリスト教の諸伝統による現代神学の整理がなされる（第四章）。取り上げられるのは、カトリック（第二ヴァチカン公会議以降を中心に）、ギリシャ正教、現代イギリス（次の福音派に対するプロテスタントの伝統的教派の神学の代表？）、福音派（リベラル派あるいはメインライン教会に対する福音派）の四つである。こうしたキリスト教の諸伝統のバランスのとれた取り扱いは、現代のキリスト教の多様性 - 西欧キリスト教がキリスト教のすべてではない - を知るのに有益である。

次に、現代神学を内容面から概観する試みがなされる（第一部の ）。本書は、現代神学の諸テーマをその倫理的実践的性格（ ）、キリスト教真理の弁証（ ）という二つの観点からまとめているが、これは現代神学へのアプローチとして適切なものである。特に倫理的実践的性格については、自然（生命と環境）、性（ 家族・身体・同性愛）の二つの具体的な問題領域が取り上げられており、読者は現代神学の争点がどこにあるかを知ることができるであろう。とくに、性・家族・身体や深層心理というテーマが三つの章にわたって論じられていることは、本書のすぐれた特徴を言えよう。

以上の現代神学の鳥瞰図から読み取ることができるのは、現代神学における「個別化」の傾向である。これに対して、神学の新たな「総合」に向かう動向については、第二部「二十一世紀の課題」からいくつかの基本的な線を確認することができる。確かに、解放の神学や人権の神学（差別、障害者、フェミニズム）は、神学の個別化の動向の典型とすることができる。しかし、第二部の各章が示すように、個々の神学的テーマを真剣に突き詰めて考え抜くことは、単なる個別化を超えたより普遍的な問題への展望をも切り開くものとなる。本書で言えば、諸宗教の対話、エキュメニズム、伝道論といった諸問題である。現代神学の多様な動向を総合することは至難の試みであるが、読者は本書の第二部の諸論文より二十一世紀の神学がその個別性を徹底するところに普遍的な神学的場が開かれること

を明確に読み取ることができるであろう。 （あしな・さだみち = 京都大学助教授）